さまざまな場で現れる子どもの「問題」から、よりよい支援を考えるフィールドワーク

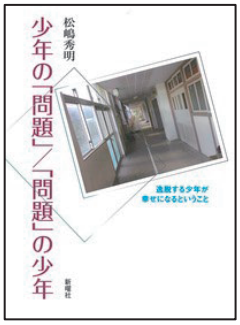
関連するSDGsの国際目標



人間文化学部　人間関係学科　　教授　　松嶋　秀明
研究分野：臨床心理学、質的研究

概要：子ども・若者を支援する現場での実践関与的フィールドワークを通して、実践現場における人々の相互的な関わりのありようを明らかにしつつ、子ども・若者へのよりよい支援のためにどのようなことができるのか構想しています。

■学校場面での子どもの外在的な問題行動への効果的支援



近年、学校現場では子どもたちへの支援が必要とされる事象が多く生じています。なかでも「学校の荒れ」や「いじめ」は、生徒がおこす外在的な問題行動がかかわっています。「学校の荒れ」は、多くの生徒から安全安心な学習環境を奪うものであり、それに対応する教師を疲弊させるものでもあります。「いじめ」は、それがもとになった自死事件がたびたび報道されるなど、被害生徒はもちろん、関わる多くの子どもの心に深い傷をのこす問題であり、学校現場はその対応におわれています。学校の荒れをひきおこす生徒、あるいはいじめの加害生徒の背景には、自己肯定感の低下、家庭での「虐待」がひきおこすトラウマ、あるいは発達特性をもつ生徒があらわす二次障害などがあり、単に問題行動をやめさせるだけではなく、これらの生徒がみせる生きづらさを解消する関わりが必要とされます。臨床心理士として実践に関わることはもちろん、特定の現場におけるフィールドワークを通して、子どもがみせる「問題」をとっかかりとして、それに関わる大人たち（教師、家族、スクールカウンセラー、警察など）がどのようにつながり、まとまればよいのかを探る研究を続けています。

■ 子ども・若者の居場所における良質な生活のあり方についての研究



近年、子ども・若者の居場所を、どのようにつくるのかという問題が社会的に関心を集めています。生きづらさをかかえる子どもたちのリジリアンス（＝レジリエンス）を育てる関わりが求められます。ひとくちに居場所といっても多様ですが、どこであれ、子どもがそこに「通ってきたい」と思えるような場になることが重要でしょう。

現場での実践関与的フィールドワークを通して、現場で関わり困難な子どもへの支援について考えています。大人たちが、子どもたちの「やりたい」をいかに引き出し、のばしているのか、子どもを管理的に指導するのではなく、むしろ、どのように褒めているのかなどを明らかにしてきました。

■ 子ども・若者の居場所における支援者コミュニティの学びに関する研究



居場所には、対人支援の専門職から大学生まで、年齢的にも経験的にも幅広い人たちが集っています。子ども家庭庁が2023年に発表した『こどもの居場所づくりに関する調査報告書』でも、多様な人々がどのようにつながり、まとまって 支援できるのかに着目した指摘が多く見られます。支援者個々のスキルアップにとどまらず、支援者たちが、総体として、いかに実践知をつくりだし・継承していくかが重要になってくるでしょう。現在、NPO芹川の河童が運営する「子ども第三の居場所」において、大学生を主体としたスタッフたちと、居場所にくる子どもたちがみせる「困った」行動をいかに理解するのか考えつつ、支援者たちの学びのありようを探っています。

＜共同研究等の状況＞
・長浜市こども家庭支援課（2016年度）、NPO芹川の河童（2022年度～現在）